

学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 劉瑞

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本人のマナーの良さは有名であり、今回の訪日活動を通じて私は日本の文化におけるマナーへの重視度合について強く感じる事ができた。私たちが毎回日本の人々と顔を合わせると、彼らはお辞儀や挨拶をし、「すみません」、「ごめんなさい」といった言葉を常々口にし、お別れの際には彼らは終始手を振ってお別れをしてくれた。

また今回の訪日活動全体を通じて私たちは多くの企業を訪問したが、各社それぞれ受入の体制が確立されていて、さらに手順や時間など細かな部分まで配慮され、私たちをA、Bの二班に分け時間の節約や効率の向上を図り、すべての見学ポイントにも相応の解説があり、ひいては些細な通路においても解説があった。また多くの企業では解説を聴きやすくするためイヤホンが準備されていた。

こうした他人へのマナーや思いやりについては、ホームステイの際にも感じる事ができた。私の話す事について彼らはとても尊重してくれ、またホストマザーが朝早くに起きてお昼に外出先で食べるお弁当の準備をするなど、こうした事に私はとても感動した。

日本には「他人に迷惑をかけない」という有名な観念があり、これは彼らの日常生活において実際に体現されている。一般家庭のゴミの分類や使用済家電の回収工場における汚染対策処理などはこうした観念の表れである。

日本という国はとても美しく、沢山の長所や私たちが学ぶべき点がある。私は今回学んだことを継続し、また家族や友人にも伝えていきたい。

大学名： 北京大学

氏 名： 高遠

テーマ： 4.日中間の交流

12月4日の午後に中国駐日大使館において郭燕公使等との交流や報告をした際に、とある日本語学部の学生が「異文化」交流という言葉を使っていた。「異文化」とは即ちdifferent cultureであり、文化的ルーツについては日中共に源を同じにしており、現段階においては「多文化間交流」という言葉の方が適切でまた意義深いと思う。

今回の「走近日企・感受日本」における今日までの7日間の「訪問」を通じ、日中双方には互いにサポートできる部分が沢山あると思った。例えば日本側には私たちが学ぶべきところが沢山あり、中国側における電子商取引、共有経済などは非常に活力を有している。また日中関係、特に一般市民の見方については私自身大きく衝撃を受けた。日本企業における企業文化構築への重視と企業の活力を刺激するための努力等については、日本を訪れる以前は全く分からなかった。そして日本の一般市民の中国への態度について言えば、ホストファミリーからの好意を受けると同時に、一部の店員の「差別対応」も垣間見られた。加えて今回の訪日で私自身沢山の驚きや理解を得る事ができた。それらは一部の面における私の認識の変化をもたらし、また「日中の民間交流と相互理解の促進」の必要性そして重要性を感じさせた。

郭燕公使が質疑応答の際に述べていた中国の努力は、日本の一部のメディアや極右勢力により捻じ曲げられ、日本の青年や学生が中国を訪れると、様々なことが聞いていた内容と異なることを知る。こうした点に私はいろいろを感

じ、やるせなさと同時に闘志そして重責も感じる。文化交流はいかなる宗教的イデオロギーよりも勝る意義を有しており、地道な交流、例えば東京の街を少し歩くだけでも「なるほど」という感嘆が生まれる。両国の民間の友好交流の力はすでに大きい、更なる発展の余地があり、丸紅やみずほ銀行の責任者が私たちへの期待として述べていた通り、私たちは今回経験した真実を家族や友人に伝えたいと思う。これは私たちへの期待であり、それ以上に私たちの責任である。

2020年には東京で夏季オリンピックが開催され、2022年には北京で冬季オリンピックが開催される。その際には互いに相手についてより多くの理解が得られることを願っている。私もその時には再度東京を訪れたい。

大学名： 北京大学

氏 名： 陳晨

テーマ： 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

この日の昼、代表団は東京に到着し、期待に満ちた活動はJALの整備工場の見学から始まった。団員らはスタッフの案内の下、飛行機の整備の最前線を見学し、航空会社の高い技術性と正確性を身近に体験した。また質問を通じ、私はJALについて以下のいくつかの認識が得られた。

一つめは、JALのサービスの質は極めて高く、良好なユーザー体験は正にJALが市場を獲得する上での武器となっている。キャビンアテンダントや機内食の質から安定した飛行体験、静かな飛行環境までいずれもJAL独特のものである。

二つめは、JALの短期的戦略で、利益率の高い欧米路線の強化により急速な収益増加を実現している。またJALは毎年40機の航空機を購入しているが、安易な新規路線の開発はしていない。

三つめは、航空類の大規模投資業界にとっては如何に投資分を回収するかは収益を出すための重要ポイントである。この点についてJALは飛行機の品質やメンテナンスを重視し、安定的に飛行機の寿命を30年以上にしており、さらに効率的な割り当てにより各時期における減価償却費用を下げるなど、収益実現のための良好な基盤を構築している。

二つの方面から見ると、

1.従来の製造業や基幹工業から見ると、日中両国の差は未だ非常に大きい。中国は自動化、精密機械、ハイテク、環境保全等の面で日本に学び、その差を縮めなければならない。

2.新興産業、デジタル経済から見ると、中国は世界をリードする立場にあり、発達した電子商取引や安価な人件費等は独特の優位性を有し、中国はニューエコノミーの発展において際立った存在となるであろう。この点については、日本は中国に学ぶべきだと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 費渝

テーマ： 1.国民性についての理解

2.集団帰属意識の強さ

今回の訪日の旅は時間こそ短かったが内容はとても豊富で、企業見学では日本企業の優れた企業文化や理念について学ぶことができたが、二日間のホームステイでは真実の日本というものについてより多くの認識が得られた。私

のホストファミリーは私に真実の日本をより多く知ってもらふ為、わざわざ自身の大学時代の同級生(リトアニア国籍の教授Romanasさん)を招き、彼らを感じる日本について紹介をしてくれた。

日本は集団帰属意識のとても強い民族だが、これは日本の民族が団結していることだけを言っているのではなく、各人が一つの集団の中に存在し、集団として互いに賛同そして存在しているのに近いものがある。Romanasさんは彼の経験について紹介してくれ、彼は大学生の頃に男友達を作ろうとしたが全て失敗した。夜にお酒を飲んでいる時は色々な話ができるが、次の日に学校に来るとそれ以前の距離間や関係に戻っていたとのことであった。日本人の集団意識はとても強く、小学生の頃は小学生のグループ、中学・高校・大学ではそれぞれのグループが存在し、知り合う方法の多くは、一つのグループに入るかまたは他人を自分のグループに引き入れるという方法で、グループの外にいる人に対しては、礼儀正しく接し一緒に行動はするが、腹の底を打ち明けることはほとんどない。またこうしたグループは日本人以外への許容度がとても低い。日本は純血民族で、遺伝子の9割以上は日本本土の遺伝子で、その他は見分けがにくい中国や韓国の遺伝子である。こうしたことから日本民族の外部民族に対する受け入れ度合は高くないことが見て取れる。もう一つの集団意識は、他人へ迷惑をかけず、個人的主張をしないという行動原則に示されている。Romanasさんはもう一つの例を紹介してくれた。もしとある日本人が流暢な英語を話す場合、友人がいる場などでは英語が得意ではないふりをする。もし彼がそのまま流暢な英語を話した場合、自慢していると思われ反感を買うことになる。こうした集団意識や個人の集団への思い入れといったものは、私たちが日本の国民性を知る上で大きく役立つものである。

大学名： 北京大学

氏 名： 李暢暢

テーマ： 1.国民性についての理解

大和民族には菊と刀の伝統があり、美や自然を敬う心と、犠牲や勇敢さといった武士道精神を併せ持っている。現代の経済において、こうした点は優れた日本の製造業に活かされている。日本人はグループに従い、秩序に従い、上司を敬うが、こうした社会の共同体への敬意の背後には、人や社会の自然災害に対する無力さと脆弱さ、それら要素による文明秩序の構築への有難味というものがある。これらは「礼(礼儀)」という行動規範に示されており、礼儀は「菊(自然)」と「刀(社会)」に通じている。美への畏敬には自然の美やその破壊への理解が込められており、自然は簡単に社会を破壊することができる、こうした危機感が大和民族の文化の奥深くに根付いていることから、礼儀と思いやり、礼儀と敬意そして秩序は特に重要なものとなり、自身への抑制や、礼儀に基づく言動に繋がっている。そして礼儀という自己欲求に対する抑制や奉仕の精神が大和民族の伝統を形成している。

大学名： 北京師範大学

氏 名： 席靖毅

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

人が赤の他人をこれほどまでに思いやれるとは、私は思いもしなかった。企業と顧客、そしてホストファミリーや私たち学生の間も然りである。

初日に日本航空のカウンターで荷物の託送手続をした際にトランクが壊れ、自分がスタッフに面倒をかけたと思っ

ていた私は、以外にも様々な事情(トランクの値段、使用期間等)を訊かれた後に弁償を約束された。私はその時とても驚かされた。企業として業務の時間や範囲内に起きた問題について即座にその責任を負い、たとえ彼らの責任ではなかったとしても、彼らは自身の顧客にいかなる負担も与えないように行動する。私は日本航空だからこそうした体験ができるのだと思った。

ホームステイの二日間、美貴さんからは至れり尽くせりのおもてなしを受けたが、これには私は、他人からこれほどまでに思いやりを受けることができるのかと改めて考えさせられた。

私が野菜嫌いであることを知り食事の際にはそうしたものを使わないことであったり、または私がアニメ好きであることを知り自発的に近場のグッズショップを調べてくれたことであったり、ひいては夜の外出の際にマフラーを用意したり、自分が中国語を学んでいるにも拘らず、私の会話の練習のために全て日本語で話してくれたり、私は常に感動しきりであった。

彼女はホストファミリーとして私の想像の何倍、何十倍もの情熱で私をもてなしてくれた。

コンビニで丁寧にお金を両替してくれた店員、企業見学の際に集団からはぐれた私を引き戻してくれたスタッフ、懇親会の時に一人でいた私に声を掛けてくれた神永さんなど、こうしたことは他にも沢山あった。

私はこうしたことから日本人の他人への思いやりについて感じる事ができた。

大学名： 北京師範大学

氏名： 王月

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本に来る前から日本はとても礼儀やマナーを重んじる国だと聞いていた。そして日本での8日間で最も印象深かったのもこうした点であった。

飛行機を下りるとすぐ、私は日本では視覚障害者用通路が整備されていて、通路配置も合理的で、さらには曲がる場所では点字ブロックで曲がる方向を示していることに気が付いた。それ以外にも、学校やデパート、会社といった建物内部においても視覚障害者へ配慮した構造になっていた。一方中国国内ではそうした視覚障害者用通路は各地により差があり、樹木や電柱が通路を遮るなどしているが、様々なこうした「人身事故に繋がりがねない通路」については泣くに泣けず笑うに笑えない状況である。その原因について考えると、中国国内ではほとんどが視覚障害者用通路の建設を任務ととらえており、表向きには完成しているが、視覚障害者の需要を考慮せず、視覚障害者への配慮が欠けている。

この他、日本での8日間では記念写真を撮ることが多かったが、正にこの写真撮影の際には日本人のマナーの素晴らしさを感じた。増上寺での写真撮影を終えた後、私は何気なく前に向かって歩いていたら、ホストマザーがとても慌てた感じで私に端を歩くよう言った。私は最初理由が分からなかったが、私の前方に写真撮影をしている人がいたことをホストマザーから聞き、ようやく私の先程の真ん中を歩く行為は他の人の写真撮影の邪魔になっていたことを知った。この出来事の後、私はこれまで以上に写真撮影の際の日本人の作法について気にするようになった。写真撮影をしている人に出くわすと、日本人は歩を止め静かに待ち、写真撮影が終わってからまた歩き出す。こうした点は人としての素養が最も分かるものである。日本は国土面積が小さく、人口も多いため、互いに思いやったり相手の立場に立ったりすることで日常生活における摩擦を減らすしかない。「他人に迷惑をかけない」という意識は日本人の中にすでに浸透している。日本の隣国であるかつての礼儀の大国である中国人のマナーについては、現在国際的に評価は高くない。徳のある優れた人を見れば同じようになろうと思うように、私たちにはマナーや思いやりの面において、日本に学ぶべき点が沢山ある。

大学名：北京師範大学

氏名：李易陽

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

今回の訪日において最も印象深かったのは日本人のマナーの良さや思いやりであった。日本に到着後、ガイドの中島雪美さんから日本人の他人へ迷惑をかけないという意識について私たちへ説明があり、その後の数日において私自身もそうした文化的雰囲気を感じた。例を挙げると、中央大学の日本人学生との両親の老後の世話における問題についての討論では、多くの日本人の両親は子どもらの負担にならないようにするという考えを持っており、自発的に自分自身や社会福祉による老後の生活を選択していることに気が付いた。これは高齢者の扶養を果たすべき義務とする中国社会における共通認識とは大きくかけ離れている。そのため日本人は赤の他人にうやうやしくするだけでなく、いつも一緒にいる人に対しても配慮をしている。

マナーについては、企業や大学の訪問を終える度に、関係者が私たちを門のところまで見送り、私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれた。パナソニックエコテクノロジーセンターの見学を終えた後、バスがS字型の道路に沿って走り、その間長い時間互いには姿が見えなかったため、私はきっと彼らは会社に戻ったであろうと思っていたが、カーブを曲がると何と彼らはまだその場で私たちに手を振っていたのである。これには驚きとそれ以上に感動を覚えた。それ以外にも大声で話をする人がいない電車や整然としたエレベーター、常に口にする「すみません」や「ありがとうございます」など、こうした所から日本社会のマナーというものを充分に見て取ることができる。「礼」はすでに習慣となり日本人それぞれの生活に浸透しており、一つのシンボルとしてその国民性となっている。

大学名：北京師範大学

氏名：賈羽飛

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

訪日活動も間もなく終わるが、私にとって最も印象深かったのは日本人のマナーの良さや思いやり、そして日本との交流であった。今回の訪日活動の当初、飛行機を降りるとすぐにお辞儀や挨拶に囲まれ、またどこに行ってもスタッフが100%の敬意をもってサービスをしてくれ、さらに彼らの笑顔や穏やかな口調は、彼らが自分の仕事に誇りを持ち、また同時にお客へのサービスを楽しんでいるかのようであった。

また、日本人の他人への思いやりにも驚かされた。例えばホームステイの際、ホストマザーの直美さんが咳き込んだ時に私が大丈夫ですかと訊ねたところ、彼女は私に心配をかけたとのことで「ごめんなさい」と謝っていた。それから他人の手助けを受けた際、ほとんどの場合に「ありがとうございます」ではなく、「すみません」と言う。それは他人へ迷惑をかけてしまったからである。さらに重山さんがバイクで私を海辺に連れて行ってくれた際、私が携帯電話で写真が撮れるように指先の出た手袋を準備してくれていた。この国ではどこに行っても身の周りには互いに尊重する、互いに思いやる人が溢れ、自分自身がそうした雰囲気を享受するだけでなく、相手のことを思いやらずにはいられない感じであった。

最後の日中の交流についてだが、それは今回の旅を通じて常に感じられたものであり、初日から私たちの交流は始まっていた。その中では沢山の感動があったが、ここでは一番印象深かったホームステイについて話をする。ホームステイが始まる前、私はたった一年しか日本語を学んでいないことから、日本語をうまく話せなかったり、話題に困ったりするのではないかと心配していたが、直美さんに会ってそうした私の心配は完全に無用だということが分かった。

交流とは相手に意志を伝えることであり、互いに理解し合う心があれば、それは難しいことではない。私はホストファザーやホストマザーと沢山おしゃべりをしたが、その中でどうしてもうまく伝わらないことについては紙に書いて伝えた。ホームステイにおいて私には言葉を原因とした悩みはなく、思い出はすべて楽しく充実したものであった。

8日間の旅では沢山の収穫が得られ、日中友好に尽力する多くの人々と出会い深く感動すると同時に、この国を離れる今では思い出と名残惜しさで一杯である。帰国の後、私は日本の人々の友好への思いや日本の優れた企業や大学への訪問で見聞きしたことを周りの人へ伝えたいと思う。

大学名： 北京師範大学

氏名： 尚楚岳

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

まず初めに、日本での8日間においては一部の日本人のマナーの悪さを目にした。ホストファミリーも日本人全てが良い人だとは思わない方がいいと言っていた。確かにその通りで、「マナー」についての論争は常に存在しているが、ここでは私が実際に目にしたマナーのしっかりした日本人について話をしたい。

初めはサービス業のスタッフで、商店の店員やホテルのフロント等、ランクが高いほどそのマナーが優れ、時には不思議に感じるほどであった。また企業見学の際には日本のエリート集団や企業で出会った警備員や企業内の解説担当者などはいずれも礼儀や他人への尊重を自分自身の事とし、最も印象深かったのは、各企業の守衛さんが離れていくバスにお辞儀や敬礼をしている場面であった。

また私たちが訪問した企業の従業員や大学の学生や教師など、トップ企業に入ることができるような教育水準が高くマナーがしっかりした人については所作の一つひとつをとっても他人への配慮が感じられ、閉まりそうなドアを支えたり、ごみを自分のポケットにしまったり、携帯電話をマナーモードにしたりと日本人の他人への思いやりや他人に迷惑をかけないといった人柄が表れていた。

それから私が今回体験した出来事だが、街を歩いていて実際には私たちが道をふさいでいて私たちもすぐにそれに気付いたのだが、思いがけず後にいた歩行者からお詫びをされた。更にはホストファミリーからの私へのおもてなしでは挨拶、食事、日程、入浴など全てにおいて私のことを優先してくれていた。こうしたおもてなしや挨拶に私は心から感動した。

最後は社会的な習慣で、日本では電車の乗り降りにおいて先に下車し後に乗車することは実現可能であることに気が付いた。また道を歩いていて車にひかれるといった心配はほぼなく、皆はしっかりと交通ルールを守っている。もちろんこれらは行動習慣によるもので突発的なものではない。

悪い行為もちろん存在するが、日本人は全体的にマナーが優れている。またこうしたマナーはすでに彼らに根付いているものである。

大学名： 北京理工大学

氏名： 王天竹

テーマ： 4. 日中間の交流

私はこれまで「国家間の交流」とはどういうことなのかについて理解してはいなかった。高校生の頃に模擬国連という部活動に参加したことがあり、そこでの会議の際、私たちは決まって「意思疎通や交流を強化する」という言葉を使っ

ていたが、私はそうした言葉は政府側の決まり文句だと思っていた。そして私はこの文章を書く現在になってやっと交流とは何なのかについて知ることができた。

この8日間において、私たちは企業と交流し各企業のモットーや企業文化を知った。また日本在住の華人や華僑と交流し、彼らからは日本での学習、生活、仕事など様々な面からの紹介を受けた。そして日本の大学生との二度の交流では皆が最後に名残惜しく感じる程であった。こうしたことから現在では、私の中の日本へのイメージはこれまで想像していたものとは全く異なっている。

私たちはよく、現代の青年は独立した思考能力を持たねばならないということを口にする。しかしこうした独立した思考とは実際の体験の上に成り立つものである。そのため、今回のような訪日の体験は非常に得難いものであると言える。もし今後私の家族が外国人学生を受け入れることがあれば、私はきっと喜んでもてなすだろう。

国家レベルでの日中両国の微妙で変化の多い関係については、皆が向き合わなければいけない話題であり、時折私たちは世論に流され他人の言葉の受け売りをしてしまう。しかし実際に体験していない事については、むやみに結論を出してはならず、ましてや現在の世界ではすでに互いの結びつきが強くなっており、いかなる国も繁雑な国際利益の場から自らのユートピアに戻ることはできないのである。日中関係の平和安定はアジア地区全体ひいては世界全体の安寧にも関わるものであり、こうした中、一大学生である私には何ができるのだろうか？

私は今回の交流で見聞きした事を持ち帰り、平和友好のメッセージを広め、より冷静で客観的な目で日中関係を見ていきたいと思う。日中両国の交流が今後さらに増え、両国が大きく繁栄していくことを願っている。

大学名：北京理工大学

氏名：王楚婷

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回の8日間の訪日活動を通じて、私には日本について多くの新たな見方が生まれた。初めにマナーについて日本での体験を話してみたい。日本人は他人に何かをしてもらった際、例え相手が仕事でそうしようが、店員であろうが、習慣的に「ありがとうございます」と言い、他人との会話や意思疎通の際は相手の話していることに対してその場で反応したり頷いたりしながら共感を示す。しかも時間にとっても正確で、他者の立場で行動予定の細かな段取りを決め、私たちの好みや食べられないものなどを丁寧に調べていた。また道路や地下鉄など人が多い場所でも何の音も聞こえず、道路では車のクラクションの音を聞くことはなかった。さらに信号無視する人もなく、食べ物を歩きながら食べることはなく、店の中で食べるか家に持ち帰って食べていた。これらは中国とは異なる習慣であった。そして日本の道路ではゴミ箱はほとんど見かけなかった。

日中間の交流については今後PRを強化すべきで、今回の訪問団のような活動をもっと増やし、日本側も中国への交流訪問団を派遣することで両国国民の相互理解と意思疎通を深めるなど、互いの固定観念を変えるサポートをしていく必要がある。

今後の中国においては環境保全関連の技術へのニーズがますます高まると考えている。ここでいう環境保全とは、技術のみならず従来の各技術に環境保全の理念を浸透させることで、環境に優しい企業へと発展させることを意味している。根本から変えることで、汚染の後に対策を行うのではなく、汚染を生まない。日本の環境保全技術の多くは私たちが学ぶべきものだと思う。

大学名：北京理工大学

氏名：丁楷軒

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

百聞は一見に如かず。日本人のマナーや思いやりは世界でもトップクラスだということはこれまで耳にしていたが、実際の体験を通じて私はそれらへの立体的また全体的な認識を得ることができた。

店員のマナーについては誰の目にも明らかで多くを語る必要はないため、ここではホームステイの感想を述べたい。私のホストファミリー菊地さん一家は私に日本人の細やかな気配りを感じさせてくれた。訪日初日にホストマザーの菊地佑美子さんから私が無事に日本に到着したかの確認があり、さらに中国語でホームステイの2日間の予定を伝えてくれた他、事前に東京見物用の乗船チケットや東京スカイツリーのチケットを予約してくれていた。またホームステイ時の最初の目的地は鎌倉だったが、東京から鎌倉までの道が混んでいたため、移動で大切な時間を無駄にしないように、ホストマザーは私とお兄さんが電車で先に鎌倉へ向かうよう指示し、その後私たちは鎌倉で沢山のお土産を買い、ホストマザーや弟さんの到着を待って一緒に鎌倉大仏を見学した。さらにもう一つ心が温まった出来事は、浅草寺の見学を終えた際に私の不注意で携帯電話のバッテリーが切れてしまい、その後のスカイツリーの見学では私が写真を撮れるようにお兄さんがすすんで自分の携帯電話を貸してくれて、見学の後には仕事を終えたお姉さんが持ってきたモバイルバッテリーを使わせてもらったことである。こうした出来事は他にも沢山あった。ホストファミリーは日本人のマナーや思いやりを真に感じさせてくれて、私はとても感動した。

礼儀の国という日本の称号は評判通りのものであった。

大学名：北京理工大学

氏名：詹天予

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

先進国である日本と発展途上国の中国との違いについては、公共施設や市民の全体的素養などから多少見て取ることができる。日本のトイレには赤ちゃん用のスペースが設置されている。一部の商店のゲートは自動ドアで、旧式のドアより便利である。一部の公共施設以外にも多くの部分において日本人のマナーが感じられた。例えばエスカレーターに乗る際は皆が左側に立ち、右側を急ぐ人の通行用に空けていた。また私とホストファミリーが地下鉄駅でエレベーターに乗る際、傍の人は私たちがベビーカーを押していたことから自発的に私たちに先に乗せてくれた。地下鉄の中は、人はとても多いが全く騒々しくなかった。良い環境を作るため、訪問先の企業や学校はあらゆる場所がとても清潔で、たまたま見かけた掃除のおばさんは、掃除機で熱心に地面の埃を掃除していた。ここの全ての従業員の勤務態度は同様に最善を尽くすべく真剣なものであった。

こうしたマナーの他にも、日本という国の細かな部分への重視というものについては私たちが学ぶべきものである。バスのシートベルトの内側を黒に外側をグレーに色分けする、階段の最後の数段に1・2・3と数字を付けることで降りる際に不注意での転倒を回避する、高層ビルの窓に赤い三角形のマークを付け、災害時に救助作業員がその窓を割り救助を行うなどである。

他にもこの数日での体験により、私は日本について沢山の新たな認識を得ることができた。それらはいずれも印象深いものであり、私たちは彼らの物事への緻密で真剣な態度やマナーといったものから学び、中国を経済のみならず文化的にも発展させていく必要がある。

大学名：北京理工大学

氏名：汪俊呈

テーマ：5.アニメなどのソフトパワー

理工系の学生として私は今回日本を訪れ、いくつかの技術系企業について特に印象に残った。まずはパナソニックエコテクノロジーセンターで、同社は松下幸之助氏の環境保全理念を受け継ぎ、廃棄家電の回収を通じて希少原料の高純度回収を行い、原料のリサイクルを実現することで社会的価値の創造と資源浪費の抑制、そしてゴミの削減を図っている。同社の工場の見学を終え、その技術や生産ラインの完成度合には驚かされた。日本においては環境保全技術とは絵空事ではなく、成熟した、また大きな社会的価値を生み出す技術そして産業であった。一方中国は広い国土を有しており、日本のようにゴミの埋め立ての場所に困ることはないが、資源の過度の消費や利用可能用地の減少に伴い、こうした環境保全や資源のリサイクル技術は今後中国においても普及していくであろう。

もう一つは三菱電機で、私たちは同社のサーボモータ製造工場を見学した。工場内で私たちが目にしたのは、慌ただしく働く作業員の姿ではなく全自動のロボットアームで、その他わずか数人の制御パネルを操作する技術スタッフ、そして大型パネルに次々と示される製品パラメータや生産状況であった。こうした自動化の生産ラインは全てその背後にある E-Factory システムの恩恵を受けている。製品の生産状況をリアルタイムに伝送し、中央演算装置が処理を行い各生産ラインにフィードバックすることで、高効率でスマートな生産を実現している。スマート製造やインダストリー4.0を推進している現在の中国において、こうしたスマート製造システムはメイドインチャイナ2025の全面的推進における技術基盤となるであろう。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：馬惠琳

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

これまで日本における自殺率は高いと聞いていたが、今回実際に日本を訪れ、人々の幸福度の高さに驚かされた。私が目にしたのはほんの一部分かも知れないが、普段中国で私の身の周りにいる人々で、今回目にした彼らに匹敵するほど幸福度の高い人はいない。私のホストファミリーは典型的な幸せな家庭であった。

私はこうした幸福感とは彼らの生活や仕事への真剣な向き合い方から来ていると思う。今回の日本での8日間では、工場見学の際またコンビニでの買い物の際など様々な場面においてその特徴的な細やかな仕事の流れがあり、彼らはそれらを全て真剣に行っていた。初め私はこうしたことは仕事の効率を大きく下げ、時間やエネルギーを無駄にしているのではないかと思っていた。中国では工場の作業効率は高く、技術スタッフは寝食を忘れ、研究スタッフは一心不乱に仕事をしているが工場内はごちゃごちゃしそれを気にも留めない。住まいも同様で、日本人は多くの時間をかけ家の中をきれいに片付ける。そのため女性の多くは専業主婦であり、中国では女性の地位が高く、その多くは仕事に明け暮れているが家の中はごちゃごちゃしている。日中のこうした違いは大きいですが、どちらがいいのかと言えば、私はどちらにも利益と弊害があると思う。またこうした違いが生まれた原因については、効率と真面目さにおいて中国は効率を優先し、日本は真面目さを優先しているからである。日本は効率と真面目さをはかりにかけ、こうした細部にこだわる態度を始終徹底していることで、人付き合いにおける挨拶やマナー、互いに贈り物をする、時間を守る、事前に準備をする、サービス業が世界トップクラス、ゴミの分類処理が正確、都市計画に死角がない、あらゆる場所がきれいで清潔等の様々な面で彼らの真面目で細部にこだわる国民性を示している。また正にこうした細やかさが彼ら

の生活に洗練さや秩序をもたらすことで、彼らが実現したい事については熟慮の上で事前に準備をし、真剣に向きあい実現への努力をし、細部を見逃さず完璧を目指す。効率的には多少劣っても、予想通りの成果を成し遂げた最終的な結果として人々の幸福度は概ね高いものになっている。

中国は現在発展における重要な時期にある。効率の追求はそうした国情によるもので、私は効率の追求は人々の緊張感を高めるものでもあり、国の発展には有益だと思う。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：徐穎

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

私は「思いやり」という日本語の言葉が好きで、中国語では「為他人着想(他人のために考える)」という意味である。日本に到着した初日から私は日本人の思いやりやマナーの素晴らしさを感じていた。

今回、私は実際には自分の携帯をトイレに置き忘れたのだが、それをレストランに置き忘れたと勘違いしたことがあった。当初私がレストランのスタッフに伝えたところ、彼はテーブルの下を含めあらゆる場所を探してくれたのだが当然見つからず、その後私がトイレで自分の携帯を見つけそのスタッフに告げたところ、彼はとても優しい口調で、良かった、次からは気を付けてねと声を掛けてくれた。中国ではこうした場合、多くの人の反応は自分がやったのではないと慌てて責任逃れをする。日本のサービススタッフの対応にはとても感動した。企業や大学の訪問を終えその場を離れる際には、日本側のスタッフが皆私たちの姿が見えなくなるまで手を振りお別れをし、出迎えにおいては、早々に私たちを出迎えて会議室へ案内してくれた。さらに質疑応答においてはその場で分かりやすい回答をしてくれた他、たとえ本業と関係のないことでも彼らは丁寧に回答をしてくれた。

ホームステイでは日本の伝統文化の体験というよりはホストファミリーの日常生活を体験した。彼らはとても親切に浴室の使い方を教えてくれて、私が濡れた髪のまま出てきた時には澄川さんが髪を乾かさないと風邪を引いてしまうからとドライヤーを持ってきてくれた。寝る前には部屋の温度は大丈夫かどうかを確認してくれて、エアコンの使い方を教えてくれた。普段の朝食はパンを食べているホストファミリーがわざわざ私のために和式の朝食を準備してくれた。子供たちと遊んでいる際にコナンが好きという話をしたことから、この日私はコナンの2018年カレンダーを受け取った。彼らはまた私を見送り姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれた。

わずか一週間ではあったが、今回の日本訪問では多くの感動が得られた。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：張瀟

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

「日本人のマナーの良さと思いやり」

まず日本人のマナーについては二つの面があり、一つめは他人を尊重することで、二つめは他人に迷惑をかけるないということである。私は日本語学部の学生で、普段の学習においては先生が常々マナーを守るよう言っているが、今回日本を訪れ、マナーを守ることの難しさを知った。日本人は極めて他人を尊重し、商店やレストランなどのスタッフは自発的に挨拶をしさらに敬語を使い、客もすぐにこんにちとは返す。日本でのこの一週間において一番沢山話した

言葉は「ありがとうございます」であった。他人へ迷惑をかけた際にはすぐに謝る、何かをする際には他人の意向を頻りに伺う、他人に迷惑をかけないために自発的に皆が片側に並ぶ、自分の持ち物をきれいに整頓する、遅刻をしないなど、これらの努力は全て他人へ迷惑をかけないためであり、社会全体がこうした配慮をすれば、その社会には極めて高いマナーや秩序が生まれる。

次に思いやりについてだが、上の「マナー」の部分の「他人に迷惑をかけない」とは即ち他人への配慮のことである。日本人はマナーを重んじており、マナーと自制は彼らに浸透しているため、「他人を思いやる」ことはすでに彼らの無意識の動作となっており、また実際には「他人を思いやる」ことは一種の公衆道徳として、法律の遵守同様に市民それぞれがすべきことになっている。

秩序、マナー、効率、これらは日本社会から私が受けた最も印象深い三つのキーワードである。「人々が互いに思いやる」生活のように、マナーはすでに日本民族のシンボルとなっており、彼らはマナーの恩恵を受けると同時にそうしたマナーの保護に尽力している。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：孫佳濱

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本語を学ぶ学生として今回のような日本文化を実際に体験する機会が得られたことは、非常に意義深い経験であった。私は中学一年から大学二年の現在まで日本語を七年学んでいる。この七年間においては何度も日本を訪れたいと思っていたが、色々な原因によりそれは叶わなかった。今回は幸運にも優秀な先生方や各大学の学生等と一緒に日本の企業を訪問できるとのことで、私はこうした得難い機会を大切にするという気持ちで今回の旅に参加した。

日本語を学ぶ中で私は次第に日本文化にも興味が湧いた。日本語を学ぶ人であれば知っていると思うが、日本人はマナーを大切にしており、何をするにもまず他人に配慮する。日本を訪れる前、私の日本についての知識は日本語の先生から聞いたこと、もしくは日本のドラマで見たことが基になっていたが、実際に日本を訪れ、先生の言っていた通りであることが分かった。例えばマナーの面では、日本人は恩を受けた人のことを覚えており、次に会った際には必ず前回への感謝の意を述べてから、話の本題に入る。日本人は互いに見知らぬ人でも挨拶をする。公共の場ではゴミを捨てたり、騒いだり、交通ルールを守らないといった人は少ない。日本には「人に迷惑をかけないでください」という言葉があるが、これは他人を煩わさないという意味で、特にホームステイの際には、夜は冷えるからとストーブをつける、私に楽しんでもらうために渋谷、浅草、原宿を案内する、私の胃腸が弱いことを知りわざわざ暖かい日本茶を準備するなど、彼らは常に私を気遣ってくれた。今回彼らからはとても良くしてもらった。私は一生彼らのことを忘れない。

日中文化について話をすると、日中の友好発展の促進というテーマは一見とても広いと感じるが、私たちにとっては民間交流が非常に重要であり、今回日本を訪れ私は、日本人との交流においては未だ一定の理解の違いが存在するが、正にこうした違いの存在により日本文化をより良く理解できるのではないかと感じている。

大学名：北京第二外国語学院

氏名：呂嘉琦

テーマ：4.日中間の交流

今回の「走近日企・感受日本」活動はとても充実していて、時間が経つのが速く感じ、あっという間に一週間が過ぎてしまった。今回私は同年代の大学生や、ホストファミリーなど沢山の日本の人々と交流をした。ここでは日中間の交流における私たちの収穫や感想について話をしてみたい。

中央大学での交流の際、ある学生から「中国には日本に反感感情を持っている人は多いのか？」と聞かれた。この質問から私たちにはちょっとした討論が生まれた。その結果、両国の大部分の国民は相手に反感を抱くといった極端な思想は持っておらず、対立の大部分は政府レベルもしくは一部の過激派によるものであることが分かった。一般の認識から見ると、「両国の国民は互いに相手の国を排斥している」という認識は間違っている。私はこうした間違った認識が生まれた原因は両国の交流不足にあると思う。大阪大学そしてホストファミリーとの交流では、私たちは自分たちの国の文化的背景による文化の垣根を越えた交流といった文化情報の交換をしていた。互いの比較を通じて、私たちは沢山の興味深い点を発見すると共に、互いの違いから様々な思考をする機会を得ることができた。

こうした文化の垣根を越えた交流はとても大切である。特に私たちのような学生にとっては、言語能力を高めると同時に日本文化を知ることは重要である。現在、日中関係はめまぐるしく変化しているが、こうした状況の原因の一つは互いに相手を理解できていないことにあると思う。文化の垣根を越えた交流は正にこうした状況を解決する方法であり、交流による相互理解は日中関係の改善に大きな役割を果たすであろう。

だからこそ私は、今後の両国はこうした文化の垣根を越えた交流活動を多く実施することで、互いに相手の文化を理解しさらに受け入れ、悪化している日中関係を段階的に改善すべきだと思う。

大学名： 華北電力大学

氏 名： 張楠

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

日本は礼儀で有名な国であり、訪日の前に私はインターネットメディアを通じて多少知識を得ていたが、今回の訪問や交流により、彼らのマナーや文化についてより深い理解と認識が得られた。

基本的なマナーに関して、日本では家に上がる際に靴を脱ぐ習慣があり、靴下を履いて室内で行動する。温泉ではまず先に身体をきれいに洗ってから温泉に浸かる。待ち合わせの際は遅刻をしないよう5～10分前に到着し、用事がある場合は事前に知らせる。討論や交流活動の際はなるべく多く質問し、質問の際はまず自分の名前を名乗る等がある。

人付き合いに関しては、礼儀正しく、顔を合わせた際は互いにお辞儀をし、譲り合いや思いやりの心で接する。私にとって印象深かったのは、まず空港にて搭乗までの間何度も航空券の確認をすることからスタッフは常にすみませんと謝っていた。次に毎回の訪問が終わると、関係者が皆私たちを見送り、姿が見えなくなるまで手を振って別れを惜しんでくれたといったことである。ホストファミリーはまた私にとっても親切にしてくれて、すべての事において私の立場に立ち面倒を見てくれた他、常に色々な話題について私とおしゃべりしてくれたので孤独に感じることはなかった。

以上が今回の訪日での体験を踏まえ私が感じた日本のマナーである。

日本には欧米や中国とは異なる独特のマナー文化があり、それは多種多様で日本人の日常生活を踏まえたものである。日本を訪れる前、私は彼らの繁雑なマナーは交流における障害になるのではないかと思っていた。しかしながら、こうしたマナーはすでに彼らに浸透しており、互いに理解し尊重しあうことで秩序の保護の役割を果たし、日本を礼儀の国にしている。

今回貴重な日本訪問の機会が得られたことにとっても感謝している。今回の訪問を通じて私は日本の文化を学ぶと同時に自らの素養が高まり、これまで以上に他人を思いやることができるようになった。日中両国の友好関係においては、互いを尊重することが最も大切であり、互いに理解し学ぶことで共に経済や文化の発展を促進していく必要がある。

大学名：華北電力大学

氏名：付康

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

今回の8日間の訪日の旅は、私の人生において忘れられない思い出となった。

中国では、日本人は極めて細部やマナーを重視しているということを耳にしていた。そして今回の8日間の体験を通じて、私は日本人の細部へのこだわりやマナーというものに対してより深い認識を得ることができた。私は細部にこだわる背景にはヒューマニゼーションがあると思う。例えば、日本のトイレには利用者がカバンや手荷物を置ける場所が設置されていてとても便利であった。さらに建物の出口や歩道が交差する場所ではサイレンが鳴り、車が出てくる際にはサイレンが鳴ることで歩行者に注意喚起をする。ヒューマニゼーションの他には基準化という点も存在する。つまり工場における「整理整頓」という基準である。この点については三菱電機の工場を見学した際にとっても印象深く、各作業員の工具はとてきれいに整然と並べられていた。

日本人のマナーはすでに彼らの中に浸透している。レストランやホテルでは従業員は常に笑顔でお辞儀や挨拶をする。赤の他人がエレベーターで顔を合わせても挨拶をする。私たちが企業見学を終えその場を離れる際には関係者が皆私たちを見送り、姿が見えなくなるまで手を振りお別れをする他、警備員も敬礼をしながら見送る。これらの行為からは私たちへの尊重を感じた。日本人のこうした友好的なおもてなしは私にとって非常に印象深く、中国国内では体験できないものであった。インターネット上の盲目的な言論は話にならず、日本人との交流を経験してこそ初めて日本人について述べることができる。

日中両国は互いに交流を強化することで友好関係を促進できると思う。

大学名：華北電力大学

氏名：藍文鴻

テーマ：6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

今回8日間の大阪や名古屋そして東京の三ヵ所での見学や訪問を通じて、パナソニックの環境保全技術、NECの画像認識技術そして丸紅のリスク管理技術を代表とする日本の先進技術が私にとって印象深かった。中国は現在モバイル決済、人工知能搭載車等の分野においてリードする立場にあるが、実際にはモバイル決済であれ人工知能であれ、二次元の画像認識技術なしには語れない。NECでの見学において、同社はその進んだ技術処理やスマートアルゴリズムを示し、その正確性や効率性といった優位性により当該分野をリードしている。中国において拡大を続けるWechat payやAlipayといったモバイル決済分野においては、その使用環境は日々拡大そして複雑化しており、そうした複雑でまた暗い環境においていかに効率的に必要な画像を認識するかは今後求められる技術的需要である。私はモバイル決済分野において、NECは画像認識技術や再認識技術においてリードする立場を構築する他、技術提供も可能だと思う。

この他、NECが打ち出す認識技術とクラウドの統合については、未来の技術における方向性だと思う。自動運転の時代は間もなく訪れ、BaiduやGoogleも自動運転関連事業を強化している中、自動運転には画像認識技術が必要不可欠である。そして都市全体の車両制御においては、大規模なクラウドサービスが都市の交通をより快適にする。この両者が結びつけばその効果は1+1>2のものである。そのため、NECの現在の画像認識技術は事業化と同時に中国への輸出もできると思う。

大学名：華北電力大学

氏名：宇文天悦

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本に来てから私が最も印象深かったことは、日本人のマナーや他人への思いやりそして細やかさで、あらゆる面からそれは感じられた。まずサービス業だが、スタッフのお客へのマナーについては日本に向かう飛行機に乗った際にすでに感じられた。スーツケースを片手に団員を待っていたところ、通りかかったフライトアテンダントが私を見かけ笑顔で会釈をしてくれた。機内でのサービスもとても行き届いていた。ホテルでは夜に外出先から戻ると、各スタッフが笑顔で「こんばんは」と挨拶をしてくれ、私は彼らの思いやりを感じた。その他、公衆トイレの施設はとても気配りがされていた。高速道路のパーキングエリアではトイレに通じる道が車イスでの通行が可能で、内部には赤ちゃんやカバンまたステッキ用のスペースがあり、利用者の様々な利便性を考慮している。電車には優先席の他、弱冷房車両もあり、身体の具合の悪い人や高齢者そして子どもらに配慮をしている。公共サービス施設において人間本位を実現し、社会における全ての利用者の立場に立った設計をしていたことは私にとって非常に印象深いことであった。

ホームステイではさらに日本の一般家庭の思いやりについて体験することができた。ホストファミリーは私にとっても親切にしてくれた。私が食事面で食べられないものがあることから、彼らは毎回食事の際には私が食べられないものを避け、また私の好みについて細かく聞いてくれた。そして私が常に保温ボトルを持っていることに気が付いた彼らは私が秋以降は冷たい水を飲まないことを知り、家の中では温かいお茶を準備してくれたり、翌日の朝には私の保温ボトルにお湯を入れ直してくれたり、こうした細やかな思いやりには私はとても感動した。

こうしたマナーはまた赤の他人同士でも示される。ホテルのエレベーターが開き、誰かが乗ってきた場合、赤の他人であっても互いに挨拶をしたり、些細な手助けについてもすぐに感謝の意を示したりする。礼節とは相互に影響を及ぼすものであり、他人が礼を尽くせば、自分も自然と礼で返す、こうしてマナーや思いやりというものが広まっているのだと思う。マナーは日本文化における重要な構成部分であり、人々に浸透している。

大学名：華北電力大学

氏名：蒲曾鑫

テーマ：1.国民性についての理解

私は国民性という言葉は範囲が広すぎて、一つの国またはその国民について、簡単ないくつかの言葉で表すまたは性格分類により定義付けすることは難しいと考えている。そのため、自分がすべての日本人もしくは大部分の日本人について理解をしていないうちは、この問題について定義付けする資格はないと思っている。

よって私が目にしたいいくつかの現象から分析してみたい。まず私たちが宿泊したホテルニューオータニのエレベーターにて、とある老婦人が後から入ってきた中年男性が入りやすいようにドアを押さえ、男性が会釈で感謝を示し、老婦人がそれに会釈で返した。ユニークだったのはその後さらに男性が会釈を返したため、エレベーターの中は会釈の連続であった。こうした礼節を示すため、彼らは疲れたり面倒だと感じたりすることはないのであろう。或いは面倒であればあるほど良く、一見煩雑な方法でこうした礼節を示しているのかもしれない。私はこの時「辛抱強さ」や「礼儀」という場面に出くわしたと思った。

この他、見学先の各企業や大学では私たちの席に常にPR資料や飲み水が事前に準備され、さらに様々なサイズの資料が各席同じように置かれていた。こうした細やかさは非常に素晴らしいものであり、仕事への真摯な姿勢が表れていると思った。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 賈蘇元

テーマ： 7.その他

私は日本の一般市民の生活を体験し、さらに都市や企業の構造を知るために今回の訪日活動に参加した。8日間の訪問を通じて期待通りの成果が得られ、次のような感想を持つことができた。

1.中流階級の生活の質が保証され、その階級は容易には変わらない

この点はホストファミリーを通じて感じたことである。彼らは千葉県に一戸建て住宅を持ち、仕事は安定している。収入については分からないが、以上の条件から家庭環境は良いと考えられる。また彼らはそれぞれ2～3か国語を操り、さらに専門知識も有している。彼らはこうした生活水準を自ら選び、上流階級にはさほど興味を持っていない。安定した収入、年金、教育、医療制度が彼らの生活を保障しているため、彼らは平穩に生活するだけでよい。

2.都市の開放性と規則性

日本の道路は狭く平地が少ないため、建物もその場所により変化に富んでいる。しかし道路と建物の距離は変わらない。都内は高層ビルが立ち並んでいるが、込み合った感覚はなく、圧迫感は全く感じない。また緑化と建物のバランスが良い。

3.大企業は大きな発言力を有しておりクロスオーバーは少ない

明確な説明はしていないが、この観点は事実である。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 姚禹

テーマ： 4.日中間の交流

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

ここでは「今後ますます中国でニーズが高まる技術」について語ってみたい。我々個人にとって、最も分かりやすいのは身の周りの環境の変化であり、これには自然や人間社会も含まれる。自然を犠牲にした30年間の発展を経て、中国は世界の注目を集める成長を遂げたが、同時に環境に対する破壊や汚染をもたらしてきた。現在、中国人また中国政府はすでに環境の重要性を認識し、環境保護について持続的に国の発展戦略に位置付けているが、中国はこうした方面の経験や制度そして技術が不足している。一方近隣の日本は世界でもトップの環境保護強国であることから、日本の環境保護関連技術へのニーズは今後ますます高まるであろう。

例を挙げると、今回見学したパナソニックエコテクノロジーセンターのプラスチック分別技術は中国において非常に大きなニーズがあることから、今後中国に大きな影響をもたらすであろう。私はかつて生分解性プラスチックの研究室で助手をしたことがあり、その期間私は北京周辺の多数のプラスチックごみの処理状況について調査をした。北京周辺には巨大なプラスチックごみの地域が存在しており、そこから多数のプラスチック処理を行う作業場が形成されている。そこでは人が自らの手でプラスチックを分別した後粒状に粉碎し、分別できないプラスチックについては焼却または埋め立てによる処理をしている。この二つの方法については、一つは水源地や土地を汚染し、もう一つは大気を汚染するなど重大な環境問題を引き起こしている。仮にこうしたプラスチックが正しく分別されれば、プラスチックの回収率は飛躍的に高まると同時に汚染も減らすことができる。もちろん確実な実施のためには法律面の整備も必要だが、いずれにしてもこの技術へのニーズは非常に大きなものがある。

中国では、大気汚染や水質汚染、また土壌汚染などについて対策をとらなければならないが、同時に中国自体も発

展をする必要があり、そのためには環境保全技術により発展とのバランスを取らなければならない。よって、中国における環境保全技術へのニーズは今後ますます高まるであろう。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 杜文慧

テーマ： 4.日中間の交流

今回の訪日活動では日本の企業や大学を見学した他、さらにホームステイも体験し、私は日本との交流について三つの認識が得られた。

まず、日中間は技術面における相互学習や相互促進、経済面における貿易取引や商品の輸出入、交換留学プロジェクトや教育面の交流、その他訪問団の相互派遣など様々な形式による交流が可能だということである。一つの形式だけに限らず、あらゆる形式の交流により様々な角度から互いを知ることで、両国関係は良い方向へ進んでいくのである。

次に、日中間の交流は未だ不足しているということである。ホストファミリーの北島さんとの会話の中では中国のモバイル決済やシェアリングエコノミーの話題が挙がったが、彼の中国への印象は十年前で止まっていた。客観的な報道や深い交流がなければ、日本人々は実際の中国の状況を知ることはできない。十分な交流があつてこそ十分な理解ができるのである。そのため日本との民間交流を更に強化し、理解度を高める必要がある。

最後に、日中間の交流の先行きは明るいということである。中国経済の発展により、日本企業にとっての中国市場の位置付けはこれまで以上に重要なものとなっており、両国の経済交流は必然的に増えていく。今回の訪問を通じて日中両国の人々は、言葉は通じないが心は通じていると感じた。日中の民間交流にはすでに素晴らしい基盤がある他、両国は本来一衣帯水の隣国であり、共に発展し人類運命共同体を構築することが両国共通の目標であると思う。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 査懿童

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の「走近日企・感受日本」活動では全体を通して非常に印象深く、日本について従来までと違った新たな見方が生まれた。

まず最も印象深かったのは日本人のマナーであった。お店の店員はとても親切に挨拶をした上、丁寧な対応をしてくれ、たとえ何も買わなくとも終始笑顔であった。ホテルのスタッフはまた常に挨拶をしてくれ、道で会った見知らぬ人でも目が合えば互いに会釈をして譲り合う。日本は人を重んじる社会であり、至るところで思いやりが感じられる。地下鉄のプラットフォームには何の表示もなくとも、人々は意識的に降りる人を優先している。ビュッフェは常に行列ができ、三人で食事をした際に料理を一つだけ注文すると、店員は確認するまでもなく2つのお椀も一緒に持ってきてくれた。また企業見学の際は、後で困らないように最初にトイレの時間を設けてくれていた。こうした細やかな気配りはまだまだあり、日々の生活において人々から大事にされているという感覚が得られた。

その他日中間の交流について私は、今後両国は交流を更に強化すべきだと思っている。日本人の多くは未だ中国についての理解が少なく、または昔の印象に止まっている。中国でも多くの人が日本に対して凝り固まった見方をしており、実際の日本はどうなのかを知らない。両国の民間そして経済は今後交流を深め互いに相手の国の状況を知ること

で、国の垣根を越えた友情が結ばれ、さらに偏見などを減らすことができると思う。

もし日本からこうした活動の訪中団が来たら、私は是非ホストファミリーとなり中国について日本の学生に紹介をしたいと思っている。

大学名： 国際関係学院

氏 名： 辺嘉禾

テーマ： 4.日中間の交流

今回の旅では、全体を通して日中間の交流というものが示されていた。企業やその従業員、ホストファミリー、ひいてはコンビニの店員との交流において、私たちの一挙一動は中国の大学生を代表するものであった。

私は日中間の交流は今回のような民間の交流から始めていくべきだと思っている。各企業では日本人そして中国人従業員との交流を通じて、私のこれまでの日本企業へのイメージが変わり、将来への不安を多少消すことができた。日本の著名な大学の学生との交流はさらに得難いものであり、皆は年齢も近く、両国の最も代表的なグループ同士の交流と言えるものであった。私たちの間には確かに大きな違いが存在するが、いくつかの共通点もあり、こうした共通点をまとめることができれば、そうした違いという壁を越えるものになるかもしれない。私にとって非常に印象深かったのはホームステイであった。一見半強制的な交流ではあるが、私たちは皆それを楽しんでいた。特に私のような日本語を学ぶ学生にとっては、これ以上ない会話の練習の機会であった。ホストファミリーとは好きなバンドから将来のキャリア構築まで様々な話題についておしゃべりし、その際一部の単語がうまく使えなくても互いの意思疎通や交流には何の影響もなかった。私たちは人間であり、気づく心を持っている。交流したいという思いがあれば、言葉や文化の違いは問題にはならないのである。またこうした思いは日中間の交流においては必要不可欠のものである。より細かな部分から言えば、エレベーターに乗る際やホテルのスタッフとの簡単な対話などの個人レベルでの中国人と日本人の交流もまた日中間の交流である。

日中間の交流は本来政治や経済面での交流だけで認識されてはならず、こうした日常的な個人レベルでの小さな交流もまた非常に重要である。可能であれば、今回のような交流活動を今後も継続してほしいと思っている。日中両国の交流は民間から始まるべきである。